FACULTY OF LETTERS

文学部生のリアルな！学生生活 Vol. 54

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。

父に憧れて。芸妓・美代遥のマグロ生活！

文学部人文社会学科哲学専攻3年
私立東海大学付属諏訪高等学校（長野県）出身
前橋（まえばし） 亜季（あき）

なぜこの世界に

中学生の頃、大奥のドラマを見て着物を着たいと思うようになりました。それは、ただの着物ではなく、裾引きと呼ばれる反物を2反使うもので、何とも豪華絢爛。非日常的な衣装に心を奪われ、いつの間にかそのような華やかな世界で生活してみたい、そう思うようになっていました。

そんなある日、母から芸妓・舞妓という職業について聞き、インターネットでその姿を見るや否や、すぐさまそれが私の将来の夢になりました。しかし、京都で舞妓になるには、早い人なら中学校在学中から、遅くとも高校を卒業してすぐに住み込みを始めなければなりません。そのため、反対する両親を2年ほどかけて説得し、長期休みのたびに単身京都へ通い、中学在学中から住み込みの修業を始めました。

しかし、まだ中学校も卒業していないうえ、歳の近い兄弟たちが常に周りにいた私にとって、京都という遠地はあまりに寂しく涙が止まらない日々でした。そんな私を見かねた女将さんは、「いっぺん、お家に帰りよしや」そうおっしゃいました。泣く泣く長野に戻った私は、「高校を卒業したらまた京都に戻ろう」と決め、姉と同じ東海大学付属諏訪高等学校に入学しました。

初夏の目白庭園にて

哲学との出会い

高校在学中は、図書館で暇をつぶすのが好きで、宗教・哲学のコーナーに入り浸っていました。はじめは小学生の頃にハマった手塚治虫氏の「ブッダ」を久しぶりに読み直したくて図書館に向かったのですが、そこには私の興味をそそる本ばかりが並び、気が付けばありとあらゆる本を端から読み漁っていました。

その中でも私が気に入ったのは、伊佐敷隆弘先生の『死んだらどうなるのか？死生観をめぐる6つの哲学』という書籍で、死生観について非常にわかりやすく書いてありました。それでも哲学初心者だった当時の私には難しく、理解するのに大変な時間を要しました。何を言っているのか理解できずムズムズしました。しかし、そのムズムズが気持ちいいのなんのって。こうなれば、大学に行ってもっと宗教・哲学の分野を学びたい、と思うのは時間の問題でしたね。大学に行くか、京都に戻るか。悩んだ末、受験の結果に人生を委ねました。

お世話になっている旅館で

なぜ芸妓に

結果、受験に合格し、芸妓の夢は先送りにして東京での学生生活を始めました。そんなある日、商学部の授業を他学部履修で受講していた際に、講師の先生の「やりたいことがあるなら今すぐやれ。何のしがらみも無く挑戦できるのは今しかない」という言葉にハッとしました。大学卒業後は芸妓さんになりたいと思っていましたが、卒業を待たなくても

いいのでは。むしろ今がチャンスなのでは……、と気づき、芸妓になろうと決めました。

そして、その授業が終わってすぐに諏訪市長と諏訪商工会議所様にメールを送りました。「芸妓になりたいのですが、どうしたらいいですか」と。

御披露目してから

そして、ありがたいことにとんとん話が進み、令和6年3月1日、芸妓・美代遥として御披露目をさせていただきました。それからというもの、東京と長野を行ったり来たり。東京にいるときは普段の授業に加え、ラグビーサークルのマネージャー長もさせていただいていますし、時間があればアルバイトにも行きます。しかし最近は、おかげさまで芸妓のお仕事をコンスタントにいただけているので、アルバイトに行く時間はありません。授業とサークル、そして芸妓のお仕事で週の予定がいっぱいになっております。

御披露目したばかりのころ

サークルのマネージャーとして

マグロ生活とは

私の父は、毎日朝早くに起きて近くの温泉に行きます。そして、帰ってきて犬の散歩に向かいます。その後、身支度を整えながらその日のスケジュールを確認し、最後に神棚と仏壇を整え、仕事に行きます。毎日車で、東京や千葉、名古屋等へ。2日連続で東京に行かねばならないときも、家が好きなので必ずその日に帰ってきます。休みの日には、家の掃除や家族の車の洗車をして、無駄な一日を過ごしている姿を見たことがありません。

そんな父の背中を見て育ったせいか、私も家で何もしない一日に罪悪感を覚えるようになってしまいました。と言っても、最近はありがたいことに休みの日が無くて悲鳴を上げているところですが（笑）。

先週は長野と東京を3往復しました。睡眠時間もろくに取れませんでしたが、勉強もお仕事もサークルや友人との時間も、どれも有意義な時間で、無駄のない1週間だったと思います。

これこそマグロ生活！ 泳ぎ続けなければ死んでしまうマグロのような、休む暇のない多忙な日々。憧れの父の姿に何とか一歩近づけた気がして、悲鳴を上げつつもワクワクしています。勿論、人間ですから時には休むことが必要かもしれませんが、この泳ぎ続ける生活が苦しいと感じるまでは続けていけたらと思っています。これが毎日を有意義に泳ぎ続ける、私のマグロ生活。いえ、学生生活です（笑）。

文学部だより

国文へようこそ

文学部 国文学研究室

1951年、法・経・商・工といった実学中心の領域だけでなく、その学識を支える教養の充実を図るために文学部が開設されました。文学科・史学科7専攻でのスタートでした。現在13となった専攻・コースは、その分野が多岐にわたることから、中央図書館とは別に、それぞれが専門図書室を兼ねた専攻研究室を持ち、学部・大学院の学修を支える開かれた場となっています。同じ棟に教員の個人研究室や院生共同研究室が設けられているのも他学部にはない特長です。

国文は学部開設当初からある専攻で、70余年間に輩出した卒業生は全国で活躍中。高校で教わった先生に憧れて、母校中大の国文を選んだという話も耳にします。

学生は専任教員8名の指導により、くずし字を読む基礎演習（1年次）、卒論作成のためのゼミナール（3、4年次）などの専攻科目を履修しますが、その準備に役立つのが国文学研究室です。辞書などの工具書をはじめ、写本・版本を含む豊富な国語・国文関連資料を所蔵しています。学術誌「国文学解釈と鑑賞」1960年代のコラムには、教員・院生・学部生が親しく集う研究室（当時は駿河台校舎）の様子が紹介されていますが、それは多摩移転後40年以上経った現在も同様です。自習中の学生が、ふらりと立ち寄った教員に助言を求めたり、院生と文学論を交わしたりする姿が見られ、日々利用者が絶えません。

さらには1956年発足の「中央大学国文学会」が、専攻内の親睦を深めてきました。現在は院生が中心となって、教員が引率する文学散歩、古典芸能などを鑑賞する観劇会、学内外の講師を招いての講演会、研究発表会を行い、年刊の研究誌「中央大学国文」「白門国文」を発行しています。

大学での学びは与えられるのを待つのではなく自主的なものです。たとえ遠回りでも、すぐに実利に結びつかなくても、人や本とのよい出会いが、きっと学生生活を豊かにすることと思います。

窓外の林にホトトギスの声が響くこともある研究室